

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 15 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21520574

研究課題名（和文） 英語前置詞の第二言語習得研究

研究課題名（英文） Second Language Acquisition of English Prepositions

研究代表者

奉 鉉京（BONG HYUNKYUNG）

信州大学・全学教育機構・准教授

研究者番号：50434593

研究成果の概要（和文）：

本研究は類似する母語（日本語・韓国語）話者による英語前置詞の第二言語習得研究である。理論的方針として、英語の前置詞と日本語・韓国語の助詞を、意味的・統語的考察から、プロトタイプ理論に基づく習得仮説(Prototypicality Hypothesis)と生成文法に基づく言語習得仮説(Economy-Driven Development Hypothesis)を2つの実験研究を通じて検証した。

習得実験研究では、各々の中間言語、つまり、日本語・韓国語を母語とする学習者のL2としての英語の前置詞の心的標示を3つの構築段階に分けて記述し、母語の影響、習得難易度などについて議論しながら、経済性に統率された習得仮説の優越を提訴した。

研究成果の概要（英文）：

This study sets to investigate how second language learners (especially, Japanese speaking learners and Korean speaking learners) acquire English prepositions and how learned cross-linguistic associations are formed and how they are represented in a second language (L2) users' mental lexicon. Two experimental studies have been conducted in order to test hypotheses on the second language acquisition of English prepositions, representatively, the Prototypicality Hypothesis and the Economy-Driven Development Hypothesis. First experimental study aims to investigate second language (L2) acquisition of three English prepositions (at, on, in) by Japanese-speaking learners and Korean-speaking learners of English. The second experimental study aims to test hypotheses derived from the first experimental study. Research questions for the both experimental studies consist: (i) differential difficulty (Which prepositions are easier to acquire than others? , and Which senses of a preposition is the easiest to acquire or the most difficult to acquire?) ; (ii) influence of lemmatic properties of first language (L1), and second language (L2), and (iii) variability.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：外国語教育

キーワード：第二言語習得理論

1. 研究開始当初の背景

英語の前置詞と日本語と韓国語の助詞(後置詞)は、まだ分類のレベルにあり、なぜそのような分類/分布になっていくのかを探るといった問題意識は乏しい。個々の用法の観察が部分的にできている状況であり、一般化・効率的記述を意識できていない。さらに、前置詞句(PP)の意味を決めるのは前置詞(P)の意味だけではなく、共起する名詞や動詞の役割があることについても同じである。

前置詞の習得を予測する理論として、例えば、前置詞の意味を分析しているプロトタイプ理論がある。このプロトタイプ理論に基づいた前置詞の第二言語習得仮説が「プロトタイプ順習得仮説(Prototypicality Hypothesis)である。この仮説は、前置詞(P)の目的語(NP)が前置詞のプロト性を決めるといったプロトタイプ理論を取り入れ、よりプロト性の高いものが習得し易いという仮説が提案されているがその妥当性は明瞭ではない。

さらに、機能語と意味語という両性質を持つとされる前置詞は今まで母語・第二言語習得研究においてその研究領域が限られ成果が乏しい。機能範疇と語彙範疇の区別が理論の中核となる既存の習得モデルでは扱い難い。既存の習得理論(e.g. Parameter-Setting model)の変形である The Minimal Trees 仮説、Platzack(1996)の The Initial Hypothesis of Syntax Model)の仮説の検証を行うことが必要であるのが現状である。それぞれモデルの妥当性を検証しながら、実際英語前置詞の母語・第二言語習得研究も部分的・断片的であり、異なる第一言語(母語、L1)の影響や統語的・意味的特性を考慮に入れた体系的な英語前置詞の習得研究がまだない。本研究は第二言語習得研究に必要な新たなデータを提供するなど多く貢献できる。

2. 研究の目的

本研究は類似する母語(日本語/韓国語)話者による英語の前置詞の第二言語習得研究である。方針として、英語の前置詞と日本語・韓国語の助詞は、いずれもそれぞれ一枚岩的均質な文法ではない。意味的・統語的考察からそれぞれを3タイプに分けて考えるべきである。理論的枠組みとして、生成文法に基づく言語理論とそれに基づく習得理論を提訴する。特に、ミニマリストプログラムの経済性による評価選択基盤(Evaluation Matrix)や素性基盤(Feature Matrix)を導入するが、同時に、意味前置詞の意味を分類

しているプロトタイプ理論(Prototype Theory)とそれに基づくプロトタイプ習得仮説(Prototypicality Hypothesis)をテストする。

具体的に、言語研究では、英語の前置詞と日本語・韓国語の助詞は、前置詞が持つ意味的・統語的素性(Semantic and Syntactic Features、いわば Lemmatic Properties)とその素性の選択(Selection)・構成(Construction)・同意(Agree)に基づいて、分析することを理論研究の目的とする。

一方、実験研究を通じて、プロトタイプ理論に基づく習得仮説であるプロトタイプ順習得仮説(Prototypicality Hypothesis)と既存の習得理論(e.g. Parameter-Setting model)の変形である The Minimal Trees 仮説、Platzack(1996)の The Initial Hypothesis of Syntax Model)の仮説の検証を行い、その妥当性を検証する。その上、ニマリストプログラムの経済性統率習得仮説(Economy-Driven Development Hypothesis)を検証し、優越理論を提訴することを目的とする。

研究課題(Research Questions)は下記のように設定した。まず、前置詞・助詞の統語的・意味的性質の研究に関する課題は【①統語的・意味的素性(Features)の選択・構成・分布がどのようになっているのか? ; ②PPの意味解釈において、前置詞・助詞と共起する名詞の果たす役割は其々なにであるのか?】、一方、英語前置詞の第二言語習得研究の課題は【①Errors: 誤用はどのような環境で、なぜ起きるのか? どのような説明ができるのか? ; ②L1 影響: 母語の助詞、共起する形式名詞の影響はあるのか? どのように影響を及ぼすのか? ; ③発達順序: どの前置詞が習得が早い(early)・しやすい(easy)・しにくい(difficult)のか? ; ④ 心的標示: 日本人・韓国人が持っている中間言語として英語前置詞はどのような心的標示をしているのか? 文法的に類似するとされる二つの母語話者の間で、英語習得に違いはあるのか?】である。

3. 研究の方法

まずは、前置詞・助詞の統語的・意味的性質の分析研究(英語、日本語、韓国語)しながら、既存英語前置詞の母語習得及び日本語・韓国語母語話者による第二言語習得研究及び第一実験研究を行った。

第一実験では、下記のような97名の日本語を母語とする第二言語習得者と9名の韓国語母語話者を対象に実験研究を行った。

この実験研究の順序は、母語や言語的背景を問うアンケートを実施、被験者の英語能力の判定のために OPT (Oxford Placement Test) を実施、そして英語前置詞の習得予備実験を行った。そのテストには容認性判断タスク (Acceptability Judgment Task) を導入した : -2(Not acceptable), -1 (Probably not acceptable), 0 (Not sure/difficulty to judge depending on words or phrases), 1 (Probably acceptable), 2 (Acceptable)。そして実験結果は下記の方法で計算され、データの分析を行った。

Table 4 Scoring Subjects' Responses

	被験者の答え	Correct	Incorrect
a	-2 Not acceptable	0	4
b	-1 Prob. Not Acc	1	3
c	0 Not sure/	2	2
d	1 Prob. Accept.	3	1
e	2 Acceptable	4	0

第一実験に用いた3つの前置詞(at, on, in)を含む構文は下記のようなものである。

(1) Conventional (Correct) Use : Look at this map.; (b) There is a picture on the wall.; (c) We live in the country during the summer.

(2) Unconventional (Incorrect) Use: (a) ? We keep the money at a box.; (b) ? He lives on 5 Oxford street.; (c) ? He cut his foot in a piece of glass.

二回目の実験(本実験)では参加者から、57名の日本語母語話者が被験者として選ばれた。彼らは、アンケート(Questionnaire)、英語能力テスト(OPT)、そして、穴埋め形式の前置詞能力タスクを受けた。導入された前置詞は at, by, for, from, in, into, of, on, to, with である、全部で140文が導入されたが、そのうち134文が分析に選ばれた。使用されたサンプルは下記のようなものである。

(3) Space – different dimensions : a. I was () the dentist when he telephoned me. (彼が電話してきたとき、私は歯医者にいました。) ; b. Two lines meet () a point. (2本の線が1つの点で交わっている。) ; c. He hit () the ball, but missed. (彼はその球を狙って打ったが、当たらなかった。)

(4) Time – different temporality : a. Can you meet me () 4pm in the afternoon. (午後4時に会ってくれない?) ; b. The farewell party ended () dawn. (お別れ会は夜明けに終わった) ; c. He started to study hard () the beginning of September (彼は9月初めに勉強を真剣に始めた。)

4. 研究成果

第一実験研究からは下記のような結果を

得ることができた。

Table 6 Overall Mean Accuracy Scores⁶-Types

Types	Prepositions	Japanese Gs	Korean Gs
Correct	At-10 sentences	2.15 (53.9%)	2.49 (61.9%)
	On-12 sentences	2.23 (55.9%)	2.55 (63.7%)
	In-11 sentences	2.19 (54.7%)	2.49 (62.4%)
Incorrect	At-6 sentences	2.69 (67.2%)	2.37(59.3%)
	On-6 sentences	2.73 (68.3%)	2.74(68.5%)
	In- 6 sentences	2.26 (56.4%)	2.11(52.8%)

Table 7 Overall Mean Accuracy Scores-Japanese

Groups/ Tokens	Japanese JG1 (elementary)	Japanese JG2 (Intermediate)	Japanese JG3 (Advanced)
At-16 sentences	2.25 (56.1%)	2.31 (57.7%)	2.54 (63.6%)
On-18 sentences	2.26 (56.4%)	2.42 (60.43)	2.44 (61.1%)
In-17 sentences	1.93 (48.3)	2.18 (54.5%)	2.21 (55.3%)

Table 8 Overall Mean Accuracy Scores-Korean

Groups/ Tokens	Korean KG1 (elementary)	Korean KG2 (Intermediate)	Korean KG3 (Advanced)
At-16 sentences	2.28 (57.0%)	2.48 (62.0%)	2.69 (67.2%)
On-18 sentences	2.31 (57.6%)	2.65 (66.2%)	3.17 (79.2%)
In-17 sentences	2.15 (53.7%)	2.41 (60.3%)	2.71 (67.7%)

この結果から言えるのは、一つ目は、実験の妥当性と実験に使った文の種類や難易度が均等であることが分かる。次に、全体的に韓国語母語話者が日本語母語話者より、わずかではあるが(5~20%)、前置詞の文法性判断がより優れている。詳細な議論は奉(2010)を参照せよ。

Table 9 Breakdown of Accuracy Mean Scores of At

Instances	Japanese	Korean	Sum	Remark
O -at the front door	2.54	3.00	2.58	Proto
O-at this map	3.88	3.67	3.86	C sense
O-at the age of 80	2.61	2.78	2.62	B sense
O-at war	0.70	1.33	0.75	A sense
O-at Lesson 7	2.09	3.22	2.19	Proto
O-at work	2.00	2.33	2.03	A sense
O-at a dollar each	1.77	1.89	1.77	B sense
O-at the children	1.66	1.56	1.65	C sense
O-at our request	1.61	1.88	1.63	B sense
O-at the hospital	2.70	3.11	2.73	Proto
X-at danger	3.20	2.56	3.14	11at
X-at a hill	2.70	2.11	2.64	12at
X- at World War II	3.02	2.11	2.94	13at
X-at display	2.03	2.00	2.03	14at
X-at a box	2.86	3.22	2.89	15at
X-at my birthday	2.33	2.22	2.32	16at
Mean	2.36	2.44	2.36	
Mean Achievement	58.9 %	60.9 %	59.5 %	

さらに、上記の結果はプロトタイプに基づくプロト性順習得仮説 (Prototypicality Hypothesis) が予測するプロト性の高いもの(Proto)が必ずしも習得し易い(easy)とは限らないという結果を得た。さらに、プロト性の低い(Proto C sense)が必ずしも習得し難い(Difficult) ことではなかった。結果、プロト

性順序習得仮説は指示された、むしろ仮説の欠点を明らかにする実験結果をえた。

第二実験で得た結果の一部を考察しよう。

Table 5 Adequate English Preposition Placements

Types of P (tokens)	JSL G1(13) (Elementary)	JSL G2 (24) (Pre-Interm.)	JSL G3 (20) (Intermediate)
At (13)	31/169 (18.34%)	74/312 (23.71%)	66/260 (25.38%)
By (8)	25/104 (24.04%)	59/192 (30.73%)	59/160 (36.88%)
For (16)	37/592 (17.79%)	118/384 (30.73%)	129/320 (40.31%)
From (10)	51/130 (39.2%)	84/240 (35.0%)	89/200 (44.5%)
In (18)	75/234 (32.05%)	139/432 (32.18%)	129/360 (35.83%)
Into (9)	24/117 (20.51%)	55/216 (25.46%)	52/180 (28.89%)
Of (10)	56/130 (43.08)	103/240 (42.92%)	99/200 (49.5%)
On (22)	105/286 (36.71%)	186/528 (35.23%)	194/440 (38.44%)
To (16)	57/208 (27.40%)	101/384 (26.30%)	111/320 (34.69%)
With (12)	32/156 (20.51%)	66/288 (22.92%)	75/240 (31.25%)
Total (134)	493/1742 (28.30%)	985/3216 (30.62%)	1003/2680 (37.42%)

Table 6 Frequencies of Adequate Preposition Placements Cross-Classified by Prepositions and Three Groups

Preposition /No. Tokens	G1 13	G2 24	G3 20	Sum	TT	Ave.
at	13	31	74	66	171	0.2311
by	8	25	59	59	143	0.3136
for	16	37	118	129	284	0.3114
from	10	51	84	89	224	0.3930
in	18	75	139	129	343	0.3343
into	9	24	55	52	131	0.2554
of	10	56	103	99	258	0.4526
on	22	105	186	194	485	0.3868
to	16	57	101	111	269	0.2950
with	12	32	66	75	173	0.2529
TT	135	494	987	1006	2487	0.3122

結果、下記のような前置詞の習得難易度表を得ることが出来た。

Table 7: Scale of the Different Difficulty

← Easy =	Prepositions	Performance	Degree
=====	of	0.452632	Easy
	from	0.392982	
	on	0.386762	
	in	0.334308	
	by	0.313596	Middle
	for	0.311404	Middle
	to	0.294956	
	into	0.255361	
	with	0.252924	
	at	0.221805	Difficult

日本語母語話者にとって、前置詞 ‘at’ が実験でテストされた前置詞のなかでは一番難しいと思われる。一方、機能範疇とも言われる ‘of’ が一番習得し易いということが分かる。言い換えれば、上記の結果は、日本語母語話者にとって、of の使用や生起環境などは他の前置詞に比べて、習得出来ている（分かっている）ことを示唆している。一番難しい

(一番出来てない) 前置詞は、‘at’ で、日本語の影響はあまり見受けることが出来なかった。結果をより詳細に見てみよう。

Table 8 Breakdown of Frequencies of ‘at’⁷

Instances	JSLG1 (13)	JSLG2 (24)	JSLG3 (20)	Sum (57)
Spatial Relation (A)				
11. Two lines meet <i>at</i> a point.	6	14	11	31 (54.4%)
6. I was <i>at</i> the dentist when he	4	6	5	15 (26.3%)
13. I am ~ <i>at</i> Shinshu Uni.	0	8	8	16 (28.1%)
Spatial Relation (B)				
7. She lives <i>at</i> 12 Crystal Street.	1	5	1	7 (12.3%)
8. ~put the microwave <i>at</i> three meters from the table.	2	1	2	5 (8.8%)
Spatial Relation (C)				
4. hit <i>at</i> the ball, but missed.	3	5	5	13 (22.8%)
12. shot <i>at</i> the bear, but the bullet~	1	3	3	7 (12.3%)
5. threw a bone <i>at</i> the dog.	0	2	3	5 (8.8%)
Temporal Relation				
3. meet me <i>at</i> 4 in the afternoon.	9	22	17	48 (84.2%)
2. study hard <i>at</i> the beginning of Sept.	1	5	8	14 (24.6%)
10. ~party ended <i>at</i> dawn.	2	0	1	3 (5.3%)
Abstract Relation				
9. She is <i>at</i> her happiest when she~	1	2	1	4 (7.0%)
1. delicate <i>at</i> heart	1	1	1	3 (5.3%)
Total (13)	31 (18.3%)	74 (23.7%)	66 (25.4%)	171 (23.1%)

プロトタイプ仮説は at の用法の中で、at の目的語が空間的で個体であるときよりプロト性が高く、習得しやすいと予測するが、それとは反対に、結果は、前置詞 at の用法の中の、時間的で抽象的な一定の時間を表わす場合の用法 (meet me at 4 in the afternoon) が日本語母語話者にとっては習得しやすい (分かっている) ことを示唆する。

さらに、プロト性の高いと思われる例、つまり、空間用法で、前置詞の目的語が個体である場合 (hit at the ball, shot at the bear)、日本語母語話者にとってはむしろ一番出来ていない (習得し難い) という結果になっている。いわば、プロト性仮説は支持されず、むしろ反論する結果となっていることが分かる (詳細な議論は奉 (2011a) 参照)。

前置詞と前置詞の目的語の性質だけで ‘プロト性’ を決める理論を習得に応用することには少しむりがあるかのように思われる。さらに、母語の影響による前置詞の誤用であると主張し、プロト性仮説を支持するが、実際本実験結果では、特に、前置詞 ‘at’ の習得判定テストでは、顕著な「母語影響」、いわば、「日本語の ni/de」による前置詞の誤用は僅かで、極めて低い頻度で、日本語の「ni/de」を前置詞 ‘at’ の代わりに使用する被験者も

あったが、それは規則的なものではなかった(詳細な誤用分析(Error Analysis)や母語影響(L1 Influence)などは奉(2010, 2011a/b)を参照)。

結論として、プロト性の高低や母語影響では、日本語母語話者による英語前置詞の習得順序や難易度は説明出来ないことが明らかである。一方、前置詞を選択するとされる動詞の種類やその動詞の意味的・統語的特性(Lemmatic Properties)を前置詞の持つ意味的・統語的特性も考慮に入れて、考えるべきであるという Economy-Driven Development Hypothesis の主張が支持される。さらに、前置詞の目的語が同じ空間用法の個体であるとしても、共起する動詞の種類や統語的・意味的特性(どの用法の前置詞を補語として取るかを定める)が習得順序を決める際に重要な役割を果たしていると主張する「Economy Driven Development Hypothesis」が支持される実験結果であった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 13 件)

- ① 奉鉉京「Acquisition of the English Preposition 'at」、『信州大学人文社会科学研究所：橋浦史一教授・山本省教授退職記念』、第 6 号、頁 148-164、査読有、(2012 年)
- ② 奉鉉京「Lemmatic Transfer in Second Language Acquisition of English Prepositions」、『環太平洋応用言語学会国際大会論文集』、第 16 号、頁 109-116、査読有、(2011 年)
- ③ 奉鉉京「How is Our Curriculum Doing: The Curriculum of English Language Education Developed and Implemented at Shinshu University」、単著、『The Korea English Education Society 国際大会論文集』、2011 年、頁 29-41、査読無(招待講演論文)、(2011 年)
- ④ 奉鉉京「English Education in Japan: The Distinct Tendency toward Globalization」、『現代英語教育学会論文集』、第 18 号、頁 15-16、査読無(依頼原稿)、(2010 年)
- ⑤ 奉鉉京「Acquisition of English Prepositions」、『環太平洋応用言語学会国際大会論文集』、第 15 号、頁 158-165、査読有、(2010 年)
- ⑥ 都築雅子 & 奉鉉京「Intelligibility and Understandability Evaluation」、共著(都築雅子 & 奉鉉京)、『環太平洋応用言語学会国際大会論文集』、第 15 号、頁 182-187、査読有、(2010 年)
- ⑦ 奉鉉京「Misdevelopment」、『The Korea

English Teaching Association (KETA) & The English Teachers Association in Korea (ETAK) 共同論文集: Creativity and Diversity in the Implementation of a New English Education Paradigm in the EFL Context』、第 1 号、頁 276-284、査読有、(2010 年)

- ⑧ J. Adams & 奉鉉京「Explaining Videos: A Study of Japanese Language Learners Talking with Web-Based Video Media」、共著(J. Adams & 奉鉉京)、『The Korea English Teaching Association (KETA) & The English Teachers Association in Korea (ETAK) 共同論文集: Creativity and Diversity in the Implementation of a New English Education Paradigm in the EFL Context』、第 1 号、頁 317-321、査読有、(2010 年)
- ⑨ S. Mehmet & 奉鉉京「The Importance of Socio-Economic and Gender Differences in Language Teaching」、共著(S. Mehmet & 奉鉉京)、『The Korea English Teaching Association (KETA) & The English Teachers Association in Korea (ETAK) 共同論文集: Creativity and Diversity in the Implementation of a New English Education Paradigm in the EFL Context』、第 1 号、頁 295-300、査読有、(2010 年)
- ⑩ 奉鉉京「On the Interpretability Hypothesis」、『信州大学人文社会科学研究所』、第 4 号、頁 128-141、査読有、(2010 年)
- ⑪ 奉鉉京「UG Parameters in Second Language Acquisition」、『Ivy Never Sere: The Fiftieth Anniversary Publication of The Society of English Literature and Linguistics, Nagoya University (編者: M. Takikawa, M. Kawatsu & T. Tanaka)』、音羽書房鶴見書店: (日本)、頁 269-286、査読有、(2009 年)
- ⑫ 奉鉉京「On the Failed Functional Features Hypothesis」、『Journal of Japan English Literature Society: Studies in English, The Regional Branches Combined Issues.』、第 28 卷 1 号、頁 43-52、査読有、(2009 年)
- ⑬ 奉鉉京「On the Functional Module Inaccessibility View」、『信州大学人文社会科学研究所』、第 3 号、頁 87-101、査読有、(2009 年)

[学会発表](計 13 件)

- ① 奉鉉京、加藤鉉三 & 黒田航「Teaching English to Japanese College Students: Pedagogical Insight into a Classification of English

- Prepositions]、共同発表(奉鉉京、加藤鉉三 & 黒田航)、『International Conference of English Language Teaching (ICELT)』、マレーシア: University of Putra、(2011年9月18日)
- ② 大森裕貫、今井孝夫、都築雅子、奉鉉京、高橋直子「Applied English Grammar Based on the Latest Linguistic Theories」、共同発表(大森裕貫、今井孝夫、都築雅子、奉鉉京、高橋直子)、『第50回日本大学英語教育学会(JACET)国際大会』、日本・福岡:西南学院大学、(2011年9月1日)
- ③ 奉鉉京「Impact of Metalinguistic Information and L1 Knowledge on SLA」、単独、『TESOL ASIA International EFL Conference』、フィリピン・セブ: University of Southern Philippines、(2011年8月13日)
- ④ 奉鉉京「Lemmatic Transfer in the Second Language Acquisition of English Prepositions」、単独、『The 16th International Conference of Pan-Pacific Association of Applied Linguistics (PAAL)』、香港: The Chinese University of Hong Kong、(2011年8月8日)
- ⑤ 奉鉉京「How is Our Curriculum Doing?: The Curriculum of English Language Education Developed and Implemented in Shinshu University」、『2011 International Conference of The Korea English Education Society (KEES)』、韓国: Chungbuk National University、(2011年8月3日)
- ⑥ 奉鉉京「English Education in Japan: The Distinct Tendency toward Glocalization」、『The 18th International Conference of Modern English Education Society (MEESO)』、韓国: DaeJin University、(2010年10月23日)
- ⑦ 奉鉉京「Acquisition of English Prepositions」、『The 15th International Conference of Pan-Pacific Association of Applied Linguistics (PAAL)』、韓国: Hanyang University、(2010年8月18日)
- ⑧ 奉鉉京「Intelligibility and Understandability Evaluation」、共同(都築雅子 & 奉鉉京)、『The 15th International Conference of Pan-Pacific Association of Applied Linguistics (PAAL)』、韓国: Hanyang University、(2010年8月18日)
- ⑨ 奉鉉京「Misdevelopment」、T2010 Korea English Teaching Association (KETA) & English Teachers Association in Korea (ETAK) Joint International Conference』、韓国: Kongju National University、(2010年6月11日)
- ⑩ J. Adams & 奉鉉京「Explaining Videos: A Study of Japanese Language Learners Talking with Web-based Video Media」、共同(J. Adams & 奉鉉京)、『T2010 Korea English Teaching Association (KETA) & English Teachers Association in Korea (ETAK) Joint International Conference』、韓国: Kongju National University、(2010年6月11日)
- ⑪ S. Mehmet & 奉鉉京「The Importance of Socio-Economic and Gender Differences in Language Teaching」、共同(S. Mehmet & 奉鉉京)、『T2010 Korea English Teaching Association (KETA) & English Teachers Association in Korea (ETAK) Joint International Conference』、韓国: Kongju National University、(2010年6月11日)
- ⑫ 加藤鉉三 & 黒田航「機械翻訳精度向上を目指した接続詞asの用法記述」、共同(加藤鉉三 & 黒田航)、『日本英語学会第29回大会』、(招聘—加藤)、新潟大学、(2011年11月13日)
- ⑬ 加藤鉉三 & 奉鉉京「カラにならないfrom、fromにならないカラ」、共同(加藤鉉三 & 奉鉉京)、『日本英文学会中部支部第63回大会』、名古屋大学、(2011年10月30日)
- [図書] (計 2 件)
- ① 奉鉉京『A Minimalist Model of Language Acquisition』、VDM Verlag Dr. Muller Publishing Co. : (イギリス・アメリカ)、総頁 288、(2009年)
(<http://www.amazon.co.jp/A-Minimalist-Model-Language-Acquisition/dp/3639149548>)
- ② 加藤鉉三「認知言語学研究の方法—内省・コーパス・実験: 7章 作例と内省による研究例」、辻幸夫(監修)、中本敬子(編集)、李在鍋(編集)、加藤鉉三(原著)、頁 87-101、総頁 275、査読有、(2010年)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奉鉉京 (BONG HYUN KYUNG)
信州大学・全学教育機構・准教授
研究者番号: 50434593

(2) 研究分担者

加藤鉉三 (KATO KOZO)
信州大学・高等教育研究センター・教授
研究者番号: 20169501